

今官一(こん・かんいち)☆常設展示作家

1、今官一の生涯

＜生涯1 一生の宿縁拓く＞ 0歳～20歳 1909～1929

官一は、明治42年12月8日、弘前市大字西茂森町八幡町八拾壱番戸、曹洞宗蘭庭院で生まれた。父は養子だが鉄道員だったので寺は継がずに転勤して歩き、それに伴って官一も小学校を転校した。大正11年4月、アメリカ遊学を終えて帰国した笹森順造再興の、私立ミッションスクール東奥義塾に入学。14年4月、詩人福士幸次郎が国漢の教師として赴任、彼の命名で奥田啓二、木村繁、三上斎太郎、柳田英二らと同人誌「わらはど」を創刊する。幸次郎の生徒への影響は絶大で、在任は1年たらずであったが、ここに官一と「一生の宿縁を拓(ひらく)」ことになった。昭和2年4月、早稲田第一高等学院ロシア文学科に入学。在学中「プロレタリア映画同盟」に参加した。

＜生涯2 文学者として立つ決意＞ 21歳～34歳 1930～1943

昭和5年、ロシア文学科の廃止とともに退学、帰郷。たまたま弘前に来ていた井上靖らと「文学ABC」を創刊。文学者として立つことを決意し、小学校教師西谷ふみと上京、福士幸次郎の隣に所帯を持った。当時作家として立つには、同人誌を発行して作品を発表し、世間に認めてもらうしかなかった。7年「作品」に「船」を発表して千葉亀雄に推賞される。8年古谷綱武らと「海釣」を創刊、太宰治を同人に加える。9年、太宰、山岸外史、檀一雄らと「青い花」創刊。これが解散すると「日本浪漫派」に合流した。10年「海鷗の章」が朝日新聞の権威あるコラム「豆戦艦」で好評を博す。13年「旅雁の章」「雷鳥の章」「和人埋葬」の三部作を「文藝汎論」に連載、「旅雁の章」は下半期の芥川賞候補となる。

＜生涯3 幻花行—文学開花＞ 35歳～47歳 1944～1956

昭和19年4月、35歳で応召し戦艦長門に搭乗、レイテ沖開戦に参加。しかし、1200名の乗組員のうち生き残ったのはわずか30名、最愛の母は既に亡くなっていた。日本交通公社に職場復帰するが、哀しみは治しがたく創作で立つ決意をし退職。この経験を『幻花行』『不沈戦艦長門』に塗り込めた。その後も人生の師福

士幸次郎、文学の師横光利一、文学の友太宰治の死に相次いで襲われる。官一は師友の死をバネにいよいよ書かねばならぬと決意。30年「銀簪」が直木賞候補、31年3月、短編集『壁の花』（「暗い砦」「海の百合」「華麗なるポロネエズ」「星の下のクワルテット」）でようやく第35回直木賞を受賞、ここに彫琢の文学が開花したのであった。

<生涯4 理想に生きる> 48歳～68歳 1957～1977

直木賞は受賞したが、官一は流行作家にはならなかった。それは彼が、郷土の大先輩秋田雨雀に「夢見る力のない者は生きる力もない」と言われ、いつまでも夢を見続ける人であったからであり、「不当に評価されているものを正當に評価するためだけに書く」というような、かたくなまでの理想主義者であったからである。そうして書いたのが35年の『詩人福士幸次郎』であり、『牛飼いの座』『少年太宰治』であった。また、この頃から北海道や郷土に取材したものが数多く書かれていく。35年には県内の若手を糾合して、同人誌「現代人」を主宰し、38年からは長く東奥日報社「十枚小説」の選者を務める。東奥日報や、「広場」、タウン誌「あかりしび」にも執筆。

<生涯5 故郷回帰> 69歳～73歳 1978～1983

昭和53年2月、十二指腸穿孔に腹膜炎を併発。手術で一命をとりとめる。54年10月、今度は脳梗塞で倒れ、以後は車椅子の生活となる。一時は言葉を発することも物をのみ込むことも出来なくなったが、公恵夫人の決断で翌年故郷弘前に帰る。夫人の看護と医師の管理の下、心身ともに落ちつき、順調に回復、やがて口述筆記によって作品を発表するまでになる。『今官一作品』（上下巻・津軽書房）を刊行した時は、初校をすべて夫人の朗読によって校正した。

58年3月1日、急性肺炎で73歳の生涯を終える。半年も持つまいといわれて3年半も生き永らえたのは、まったく故郷の与える活力のお陰にほかならなかった。

2、今官一の代表作

○『海鷗の章』

(あらすじ)私は、昔の文学仲間では今は海兵の金持ち老人に嫁いでいるおちかから、「太古のままの海でございますから、ここでは、落つこちた鷗でさへも真蒼に染まることございませう」という便りをもらい、おちかのもとで彼女にまつわる「海に沈む花婿」を書く事を思い立つ。しかし、内におちかへの思慕をもつゆえに、小説はたちまち行きづまってしまふ。そこで東京に帰ろうと決め、老人と夜釣りに出るが、突然の石油タンクの大爆発で仰天、海に墜ちてしまふ。

中に劇中劇を取り込んだ複雑な構成で、最後は自ら構想中の小説の主人公よろしく、海に放り出されて終わる。焼け出されておちかの実家に行く、賢く愛すべき老人と車中同席した私は、たとえ空想でも、おちかを老人に叛かせないでよかったと思う。ショートショートにも似た面白さを持つ。

○『幻花行』

「柔仏寺 I」は、ジョホオル下船を許された一等水兵の私が、中尉に料亭華屋に行つて、恋人梨花に手紙を渡すように頼まれるが、熱帯林の中に迷い込み、盲目の僧ばかりが住む不思議な寺を発見する話。

「続柔仏寺」は、セクタア軍港で見た軍艦山城の無惨な姿、信天翁(あほうどり)、南十字星などの思い出を語つたあと、弾薬庫の中の反古紙の中から、畠山なる軍医の、ジョホオルの盲目集団の失明原因に関する研究を見て驚く話。

「柔仏寺後記」は戦後である。私の小説をみた大川由美から、畠山軍医の壮烈な最期を知らされたり、ニュース映画で、戦艦長門が米国原子爆弾の実験の標的にされ、水煙あげて沈むのを見て、感涙したりする話である。私はポケットのメモに「原子爆弾の花」「幻の花」と書いた。

今となつては幻のごとき、命がけの「またとない」瞬間の記録である。一篇は今亡き最愛の母に捧げられた。戦艦長門への哀しい鎮魂歌である。

○短篇集『壁の花』

「暗い砦」—明治新政府法律による、北海道最初の死刑囚カニ。アイヌに拾われ、天皇と同じく嘉仁と名づけられたために、天皇の影の存在として運命づけられ、あらゆる英雄的行為にもかかわらず罰せられていく、そういう男の抵抗。

「海の百合」—すべて気まぐれな憂愁夫人。背徳の誘いを求める離魂者。25歳の戦争未亡人の妖しき生理。

「華麗なるポロネーズ」―「あの笑ふべき敗残兵に似て、はるかな水平線のかなたへ、なだれ行くものへの、せいいつぱいの『みゆぢつく』を高くひびかせたいと欲していた」己の真実。35歳の老水兵の耳に残る愛のポロネーズ。青春の回顧録。

「星の下のクワルテット」―「四つの生が『あつた』とは、いふまい。燈火は消えても、燃えつづける、生はあるのだ。それがどこかにあるのだとしたら」―オラトリオ形式の五つの楽章、四つの生の賛歌。

師横光利一の心理小説の影響を感じさせる傑作群。

○『牛飼いの座』

北海道開拓使技官エドウィン・ダンの伝記である。ダンは、アメリカはオハイオ州の人。日本に牛と羊を提供した縁で、明治政府の黒田清隆に招かれ、明治6年6月に来日。はじめ東京の官営農場で指導、9年に札幌に渡り真駒内に北海道酪農業の基地を築いた。開拓使が廃止されるまで7年間場長を務めた。

牛飼いの座とは星座の名で、北斗七星をプラウをひく牛とみなし、それを操る人という。作品では、北海道開拓に賭ける農学校生徒の心の象徴である。

物語は、青函連絡船の航路を開き、「日本の鳥類」をまとめブレエキストン線を確立したヴレエキストン大尉を織り込み、アメリカカウボーイの壮大なフロンティアスピリットを描く。

3、今官一のキーワード

<キーワード1 幻の世>

官一がレイテ沖海戦から九死に一生を得て帰還、終戦を迎えて帰郷すると、既に母は病死しており、それに追い討ちをかけるように身近な人々の死が続いた。21年、人生の師福士幸次郎が、22年は文学の師横光利一が、23年には文学の友太宰治が死んだ。官一はこれら師友の死に際会し、改めて小説を書く決意を固める。かくして昭和22年の「幻花行Ⅰ 柔仏寺」から23年「幻花行Ⅲ 柔仏寺後記」まで、戦時における哀しくも不思議な体験が紡ぎ出され、24年一冊にまとめられて母に捧げられたのであった。

官一に「花まぼろしの世に在らば世も幻の花ならん」の色紙がある。そこには、この世を幻と見、幻に遊ぶがごとき、いうならば「色即是空、空即是色」にも似た諦観を見ることができる。これは恐らくあまたの師友の死を目撃して見えてきた官一の世界で、禅家の庭に育った官一にはかねてより親しい、心の原風景だったのでないだろうか。

<キーワード2 壁の花>

昭和 31 年 7 月作品集『壁の花』によって、官一はようやく世の注目をあび、第 35 回直木賞を受賞した。大正 14 年に同人誌「わらはど」によって文学に志してから、32 年目のことであった。

その年の 7 月、官一は、碓ヶ関で行われた葛西善蔵文学碑除幕式に参列し、人に請われて色紙をしたためた。

文は「壁の花いつか咲く日のありぬべしまた思い出る夜もありぬべし」であった。

「壁の花」とは、相手もなく、壁際に売れ残った踊り子の意味である。色紙は、そんな踊り子にも一人の恋人がいたように、官一にも彼を求める読者が一人はいるに違いない、と信じる心を表わしたものである。官一は有名になってからでも本当に書きたいと思うものしか書かなかつた。常に一握の真実の読者に向かってしか語らなかつた。「壁の花」は、あくまでも理想を求め続けた、そういう官一の厳しい創作態度を物語ったものである。

4、今官一のゆかりの場所

①作家たらんとして上京

師福士幸次郎の隣り(東京都中野区野方町)

昭和 5 年、小学校教師西谷ふみとともに作家たらんとして上京、恩師の福士幸次郎の世話でその隣家に所帯を持った。また幸次郎の推薦で、百田宗治門下と福士門下が集う「野方会」にも入り、佐藤一英や近藤東らと知り合った。

横光利一に師事し、文学修行に励んだ。

5、今官一の関連人物

☆福士幸次郎(ふくし・こうじろう):人生の師

大正 14 年 4 月、官一が東奥義塾 4 年の時、国漢の教師として赴任、翌 15 年 1 月 31 日まで在職した。わずか 9 カ月間に過ぎなかったが、既に詩壇の重鎮とみなされていた幸次郎の、生徒に与えた影響力は多大で、彼の命名でガリ版刷り雑誌「わらはど」が創刊された。官一の文学的開眼は幸次郎に負うところ大である。また幸次郎は、昭和 5 年に官一が作家たらんとして上京した際にも隣家に住まわせ、詩人百田宗治に引き合わせるなど世話している。ここに官一は幸次郎によって「一生の宿縁」を拓(ひら)かれたのである。官一は「万葉集と唐詩選を読みなさい」という幸次郎の助言を座右の銘として、一生守り続けた。

☆横光利一(よこみつ・りいち):文学の師

昭和 6 年、官一は、福士幸次郎門下の佐藤一英の紹介で、小説の神様といわれた横光利一に会い、師弟の礼をとった。利一は、直接は褒めることはしなかったが、奥さんの名を借りて、それとなく官一を激励し続けた。官一の持参した「船」「敵」「狸」が、そのころ新人の登竜門とみなされていた「作品」に矢継ぎ早に掲載され、千葉亀雄の推奨を受けたのも、師のおかげであった。

昭和 22 年、利一が 49 歳で亡くなった。官一は翌 23 年、「後架の詞」を追悼に捧げ、不肖の弟子ながら、生涯精進し続けることを誓ったのであった。

☆太宰治(だざい・おさむ):文学の友

官一と同じ明治 42 年、金木村に生まれた。ともに同人誌から出発し、官一は東奥義塾で「わらはど」に加わり、太宰は旧制弘高で「細胞文芸」を創刊する。上京して、はじめは官一が太宰を「海豹」に誘い、続いて「青い花」「日本浪漫派」へと進む。が、皮肉にも太宰のほうが華々しく文壇にデビューしてしまう。官一は度々芥川賞、直木賞候補になりながら、文壇から遠かった。しかし、昭和 31 年ついに直木賞を受賞。一方、太宰は芥川賞を得ることなく、昭和 23 年に入水自殺。

終生二人は文学上のよきライバルとして在り続けた。官一が太宰に言及したものは『わが友太宰治』(津軽書房 平成 4 年)にまとめられてある。

6、今官一の資料紹介

○花まぼろしの世に在らば世も幻の花ならん

書画(色紙)

271mm×243mm

「花まぼろしの世に在らば世も幻の花ならん」の詩句。

○花もて語れ

書画(色紙)

271mm×243mm

「花もて語れ」の詩句。

○飛矢不動

書画(色紙)

1983(昭和 58)年

271mm×243mm

「飛矢不動」。晩年の作。

○「鴉の宿はここである」第一章冬の湖の三

原稿

1965(昭和 40)年

255 mm×360 mm(×52 枚)

「鴉の宿はここである」は「自由」(昭和 40 年1月～6月)に掲載されたもの。社会主義詩人大塚甲山を取り上げたもので、表題は甲山の詩から採っている。第一章冬の湖(明治 37 年)の三の部分。

7、今官一年譜

- 1909(明治 42)年…12月8日、弘前市西茂森町蘭庭院に生まれる。
- 1916(大正 5)年…国鉄職員の父の転勤で、岩手県一戸尋常小学校に入学。以後数度転校す。
- 1922(大正 11)年…4月、笹森順造再興の私立東奥義塾に入学。
- 1925(大正 14)年…4月、教師として詩人福士幸次郎赴任。雑誌「わらはど」創刊。官一文学開眼す。
- 1927(昭和 2)年…4月、早稲田第一高等学院ロシア文学科入学。「プロレタリア映画同盟」に参加。
- 1930(昭和 5)年…中退し帰郷。井上靖らと「文学ABC」創刊。西谷ふみと共に上京。横光利一に師事。
- 1932(昭和 7)年…8月、「船」を発表、千葉亀雄に推賞される。
- 1933(昭和 8)年…古谷綱武らと「海豹」創刊。同人に太宰治を加える。
- 1934(昭和 9)年…太宰、檀一雄、山岸外史らと「青い花」創刊。1号で解散「日本浪漫派」に合流。
- 1935(昭和 10)年…「海鷗の章」が朝日新聞のコラム「豆戦艦」で好評を博す。
- 1938(昭和 13)年…「文芸汎論」に連載した「旅雁の章」「雷鳥の章」「和人埋葬」(改題後「朱実の章」)の三部作が芥川賞候補となる。
- 1939(昭和 14)年…妻ふみと別居し、影山くみ子と同棲。
- 1940(昭和 15)年…処女作品集『海鷗の章』刊行。「氷柱日記」が風俗壊乱の理由で、雑誌発禁となる。
- 1941(昭和 16)年…10月、鉄道省観光局に就職、「観光」編集。
- 1944(昭和 19)年…4月、35歳で応召、横須賀海兵団に入団。戦艦長門に搭乗、レイテ沖開戦に参加、九死に一生を得て帰還。
- 1945(昭和 20)年…帰郷、母の病没を知る。
- 1946(昭和 21)年…10月、師福士幸次郎逝去。創作一本で立つことを決意、8月「幻花行 I 柔仏寺」発表。
- 1947(昭和 22)年…12月、文学の師横光利一逝去。
- 1948(昭和 23)年…6月、文学の友太宰治入水自殺。
- 1955(昭和 30)年…「立像」発表の「銀簪」が直木賞候補となる。
- 1956(昭和 31)年…3月、芸術社刊『壁の花』(「暗い砦」「海の百合」「華麗なるポロネエズ」「星の下のクワルテット」を収める)で、第 35 回直

木賞を受賞。

1957(昭和 32)年…4月『第十三号棧橋』を芸術社より出版、八木隆一郎の脚本で、東映映画化。

1960(昭和 35)年…11月、同人誌「現代人」を創刊、主宰。

1961(昭和 36)年…講談社から長編小説『牛飼いの座』上梓。

1963(昭和 38)年…6月から東奥日報社「十枚小説」の選者を務める。

1965(昭和 40)年…妻くみ子と別居、西村公恵と同棲。

1972(昭和 47)年…1月、『不沈戦艦長門』出版。タウン誌「あかりしび」「県政のあゆみ」等に執筆。

1976(昭和 51)年…9月、津軽書房より「巨大なる樹々の落葉」出版。この頃津軽に関するものが多い。

1978(昭和 53)年…2月、十二指腸穿孔に腹膜炎を併発して入院。手術で一命をとりとめる。

1979(昭和 54)年…10月、脳梗塞で倒れ、四肢麻痺し、生涯車椅子の生活となる。

1980(昭和 55)年…東京生活 50 年にピリオドを打ち弘前に帰る。以後は口述筆記で文章を発表し続けた。

1983(昭和 58)年…3月1日、急性肺炎で 73 年の生涯を終える。生家蘭庭院の墓地に葬られた。戒名は「幽玄院純文官光清居士」。